



テーマ：資質・能力を育成するための

カリキュラム・マネジメントと学習評価

—横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校の実践を基に—

氏名：笠原 陽子

所属・役職：玉川大学教師教育リサーチセンター客員教授

自己紹介

玉川大学教師教育リサーチセンター客員教授。独立行政法人教職員支援機構玉川大学センター 担当。玉川大学大学院教育学研究科教職大学院教授、神奈川県内の小中学校教諭、中学校長を務め、神奈川県教育委員会子ども教育支援課長、支援部長、教育参事監、教育監、顧問を歴任。現在、神奈川県教育委員会教育委員を務める。

講演概要

学習指導要領が目指す「学校教育を通じて育むべき資質・能力の育成を目指した教育課程編成、授業改善、学習評価」について校内研究を通して実証的に研究を進めた横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校（以下「附属鎌倉中学校」）の取組のうち、「学習評価」に関する実践について取り上げたものである。この研究に関しては、玉川大学教師教育リサーチセンター年報第12号2021年度（103—124）に「学校教育を通じて育むべき資質・能力の育成を目指した教育課程編成の実証的研究報告」として3年間（2018—2021年）の研究の取組をまとめている。研究が継続する中で、附属鎌倉中学校の研究は、隣接する附属鎌倉小学校との一体的研究（小中一貫）へと移行していくこととなった。そうした中において、「学習評価」に関する関心は高く（特に「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価の在り方）、附属鎌倉中学校における実践についても関心が寄せられていることもあり、附属鎌倉中学校における「学習評価」に関する研究は継続して取り組んできた（2021—2023年）。

研究を伴走する中で、改めて、学校が目指す資質・能力の育成という共通の目標に向かって、一人ひとりの先生方自身の授業実践（内容・方法・評価）が学校運営や様々な条件整備と繋がっていることを実感し、授業実践に止まらず自分たちの集団がどうあったらいいのかということについてまで課題意識と創造的な意識を持って対話を繰り返し、「共感」を得られる言葉や具体的なイメージを共有していく営みが、学校全体で取り組む「カリキュラム・マネジメント」であるということを実感した。

この研究により、「学校として育成したい資質・能力が明確であること」「学校としてカリキュラム・マネジメントのPDCAサイクルが循環していること」「個別最適な学びと協働的な学びを通して、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組んでいること」の3つが機能していることが重要であり、「学びのプラン」を活用することで教師はもちろんの事、生徒自身が授業を通して、どのような資質・能力が身に付いたのかを自覚的に捉えることができ、その結果、教育課程の改善に繋がることを確認した。